

# TEA 理論編

複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ

安田裕子・滑田明暢 編  
福田茉莉・サトウタツヤ

ワードマップ

## 思想としてのTEA

時間と文化社会的文脈のなかで発生し、  
変容・生成する人びとのライフのプロセスを捉える、  
日本で育った新しい方法論TEA。  
背後にある考え方は？ 基本的な概念は？  
他の質的方法との関連は？  
理論と基本用語、応用の可能性までを分かりやすく解説。

新曜社

ワードマップ

# TEA 理論編

複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ

安田裕子・滑田明暢 編  
福田茉莉・サトウタツヤ

新曜社



## まえがき

あなたとともにあるTEAとその未来

複線径路等至性モデル（TEM）という新しい質的研究法が提案されて10年が経過した。本書『ワードマップTEA理論編』と同時刊行されるその姉妹本『ワードマップTEA実践編』には、TEMが複線径路等至性アプローチ（TEA）として発達してきた10年間に集約されている。2冊の『ワードマップTEA』では、国内外を含め40名を越える研究者や実務家に執筆していただいた。このことは、TEAがこの10年間に、理論的にも方法的にも大きく進展し、また、研究の営みのなかで日々新たに概念や考え方が発展してきたことの証明でもある。その飛躍的な発展は、TEAの多様性と濃厚な議論展開を前に、出版社が分冊化を英断してしまったほどである（新曜社さま、ありがとうございます）。それは編者にとってもうれしい悲鳴であったが、若干泣きたい。

このような経緯で『ワードマップTEA』は【理論編】と【実践編】が一体として構成されており、【理論編】では複線径路等至性アプローチ（TEA）の根幹となる理論と方法論の枠組みが説明されている。

第I部「TEAの基本と理論的背景」では、TEA研究を先導してきた研究者がT

E Aの背景にある基本的な考え方や概念について、これまでの展開を凝縮させつつわかりやすく解説している。第1章では、T E Aという文化心理学の新しい方法論の体系について、時間の扱い方やシステムという見方、質的研究における布置などといった観点から論じられている。そして、第2章では、T E Mの基本的な概念の解説をもとに、概念ツールを介した分析のヒントが述べられている。

続く第II部「T E Aのメソドロジー」では、他の質的研究法からみたT E Aや未来的展望に基づくT E Aの応用可能性に関する議論が展開されている。第3章では、気鋭の理論研究者諸賢からT E MおよびT E Aのもつ可能性とその限界についての論評をしていただいた。第4章では、T E Aにかかわる海外研究者の新たな研究実践が、サトウタツヤ・滑田明暢による監訳のもとで紹介されている。T E Aのグローバルな展開にも触れていただけるだろう。第5章では、T E Aの特徴であるプロセスの把握やオープンシステムに基づく人間の理解に焦点をあて、類似する研究実践に従事する執筆者により、あらためてT E Aの位置づけが明らかにされている。そして、第6章では、臨床的实践と質的研究法、ないしは、質的研究法と量的研究法のあいだを往来する研究に従事する研究者によって、これからのT E Aの応用可能性について言及されている。

【理論編】では、T E AとT E Aにまつわる概念をキーワードに、研究者の多種多様な視点から――極めて個人的な視点を含めて――、T E Aについて議論されている。

る。これは、TEAがオープンな視点から、さまざまな理論や方法論、認識論、研究実践、研究者自身とのつながりのうえに発展してきたアプローチであることを如実に示しており、またTEAの発達プロセスをTEAとして捉えた先駆者たちの実践でもある。したがって、【理論編】を読むと、「いったいTEAとは何なのか」という疑問が改めて浮かぶかもしれない。しかし、それでよいのである。

TEAを簡潔に述べるならば、個人の人生径路を可視化する研究法や人間の様態をオープンシステムに基づき記述するための分析ツールであり、個人の実存にアプローチするための文化心理学的な理論とも言える。あるいは、日本から発信する質的研究のひとつとすることもできる。どれもTEAについて正しく述べており、どれもが等至点となりえるだろう。しかしいずれの見方も、TEAのすべてを表してはいない。

TEAにおける等至点は、いまここにいる研究者の実践とともに、ZOF<sup>ソフ</sup> (Zone of Finally・等至点の幅) であり続け、常に複数の等至点を設定することが可能である。だから、複数ある等至点のなかのひとつを設定するのは読み手である「あなた」でなくてはならない。TEAとは何かという疑問は、「TEAの等至点はどこか」というあらたな問いを発生させ、きつとあなたを新しい研究活動へと誘ってくれるだろう。本書のなかでもとりわけ心惹かれる箇所をみつけ、そこを等至点と設定してみよう。それにより、あなたの研究活動はTEAと融合し、また新たな局面を迎えるだろう。

興味ある議論を追及してもよいし、自分なりにカスタマイズしてもよい。

そして姉妹本【実践編】では、TEAを実際使用する方々のために、どのように分析ツールとして使用すればよいのか、興味深い研究の数々とともに紹介されている。TEAを使いたいという方はぜひ、本書【理論編】とあわせて【実践編】をご一読いただきたい。

私たちは本書ならびにTEAが、あなたの研究活動の促進的記号として機能することを願っている。10年後には、TEAに関する新たな未来への展望が拡がり、また新たな概念や理論が、——等至点でさえも——発達しているだろう。そのときは、あなたもまたTEAの発達プロセスの一部として、ひとつの記号として、このつながりに参画していることを望んでいる。

2015年2月

福田茉莉

TEA 理論編——目次

第I部 TEAの基本と理論的背景

1章 TEAというアプローチ 3

1-1 複線径路等至性アプローチ (TEA) TEM, HSI, TLMG 4

1-2 TEAにおける時間概念 時間の2つの次元 9

1-3 開放システムと形態維持 形態維持と発生のプロセス 14

1-4 実存性 文化心理学および質的研究におけるTEAの布置 19

1-5 TEM的飽和 手順化の問題 24

2章 TEMの基本と展開 29

2-1 等至性と複線径路 両極化した等至点とZOF(ゾーン・オブ・ファイナリティ)へ 30

2-2 分岐点と必須通過点 諸力(SDとSG)のせめぎあい 35

2-3 未定と未来展望 偶有性を取り込み、価値が変容する経験として 41

2-4 画期をなすこと 研究者の視点と所在 46

第Ⅱ部 TEAというメソドロジ

3章 TEMの評論、評論としてのTEM 55

3-1 発達の時間 相対的な静止と変化の入れ子 56

3-2 前方視 TEAと生涯発達との交差から捉えるライフの豊かさ 61

3-3 ポドテキスト ヴィゴツキー理論とTEM (TEA) 65

3-4 ナラティブ研究とTEM その発想はどこで交差し、どのように響きあうことになるのか 69

3-5 研究ツールとしてのTEM TEMをいつ使うのか 74

4章 海外のTEM研究 79

4-1 TEMの一般哲学 過去と未来の間 80

4-2 TEMと対話的自己理論 (DST) 夫婦間問題を理解するために 86

4-3 コンポジションワークとTEM 非可逆的時間における自己についての探求 90

- 4-4 移行、イメージーション、そしてT E M 「鳥の目」からの分析、「亀の目」からの分析 97
- 4-5 職業移行とT E Mの適用 「専門家になること」の経験の研究 101
- 4-6 発達的な文脈と経路 ブラジルにおける発達の移行に関するT E M研究の動向 106

## 5章 T E Aの布置をリフレクションする 121

- 5-1 システム論とT E A システム論としての独自性 122
- 5-2 家族療法とT E A 家族療法にT E Aを生かす 128
- 5-3 応用行動分析学とT E A 人を理解する枠組みとして 132
- 5-4 「未完の未来」を創造する媒介物 「異時間のゾーン」と活動理論(その1) 139
- 5-5 分岐を「交差」として捉え直す 「異時間のゾーン」と活動理論(その2) 147
- 5-6 ライフコースとT E A 経験のプロセスを可視化する 154

## 6章 T E Aと接点のある研究法 159

- 6-1 ケースフォアミュレーションを考える T E Aがもたらすもの 160
- 6-2 クオリティ・オブ・ライフに接近する 時間を捨象しない人生経路の記述と包括体系的な変容<sup>システムマップ</sup> 165
- 6-3 混合研究法とT E A 組み合わせのシナジー効果 172

索引  
(1)

あとがき

177

装幀  
||  
加藤光太郎



第I部

TEAの基本と理論的背景



# 1章

---

## TEAというアプローチ

## 複線径路等至性アプローチ (TEA)

TEM, HSI, TLMG

### ■複線径路等至性アプローチ (TEA)

複線径路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach: TEA) は複線径路等至性モデル (Trajectory Equifinality Model: TEM) から発展した総合的なアプローチであり、本のタイトルになるのは今回が初めてである。

TEAは文化心理学の新しい方法論の体系を提唱するものである。ここで文化心理学とは、比較文化心理学のように異なる複数の文化を相互排他的で独立所与の存在として比較するのではなく、生を享けた個人がその環境の中で生命を維持し生活し人生をまっとうするために記号を取り入れつつ生きていくプロセスを描く、心理学的試みのことを指す<sup>[1]</sup>。

TEAは複線径路等至性モデル (TEM)、歴史的構造化ご招待 (Historically Structured Inviting: HSI)、発生の三層モデル (Three Layers Model of Genesis: TLMG) を統合・統括する考え方である (図1-1)。

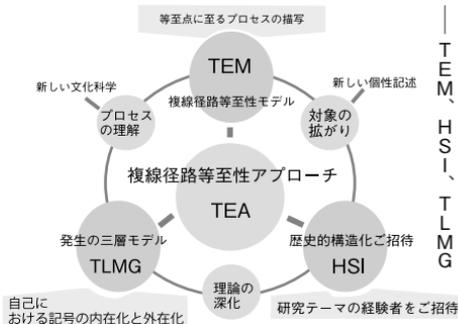


図1-1 TEAの3つの要素  
— TEM, HSI, TLMG

[1] Sato, T., Yasuda, Y., Kan-zaki, M., & Valsiner, J. 2014 From Describing to Reconstructing Life Trajectories: How the TEA (Trajectory Equifinality Approach) explicates context-dependent human phenomena. Wagoner B., Chaudhary, N. & Hviid, P. (Eds.). *Culture Psychology and its Future: Complementarity in a new key*. Information Age Publishing. pp. 93-104. Figure 2.

## ■等至点 (EFP) —— 理念的側面と方法論的側面

理念的側面から語れば、**等至点** (Equimality Point: EFP) は TEM のみならず TEA の根幹をなす概念である。この等至点という概念は、ベルタランフイによるシステム論の開放系 (オープンシステム) は等至性をもつ、というテーゼに依拠している<sup>[2]</sup>のであり、ひとつのゴール・目標に対して複数の異なる径路を想定しうる、ということを表している (図 1-2)。なお、この等至性概念は、生物学者であり新生気論 (Neo-vitalism) を唱えたとされるドリーシユに由来している<sup>[3]</sup>。生命体の生活において「同じ状態から始まり同じ目的が達成される」時でも複数の方法がとられうることに注目してそれを等至性と呼んだのである。これは生命の維持や生活において何らかの障害が生じたときに回復や補償が柔軟に可能であることを意味している。

等至点に至る複数径路を描く方法が TEM である。そして、方法論的側面からみれば、第一に等至点とは、研究の目の付け所であり、研究テーマを明確にしてくれるものである。研究者が興味をもった等至点的なイベントを実際に経験している実在の人をお招きして、その話を聞くという手続きが**歴史的構造化「招待 (HSI)」**である。そして、聞かせていただいた「等至点に至るまでの経過」を、TEA に関する概念ツールを使って径路を描くのが TEM なのである。

ここで問題になりがちなのは、分析途上で、最初に考えていた等至点とは異なる等至点が見えてくることである。ただし、これはオカシナことでも問題視すべきさま

[2] Bertalanffy, L. von 1968 *General system theory*. New York: George Braziller. (長野敬・太田邦昌 (訳) 1973 『一般システム理論——その基礎・発展・応用』みすず書房)

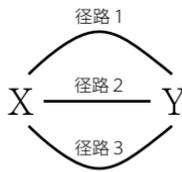


図 1-2 分岐点 (X) と等至点 (Y)

[3] Driesch, H. 1908 *The Science and Philosophy of the Organism*, 2 vols. London: Adam & Charles Black. (vol. 1, p.159).

しいことでもなく、歓迎されるべきことである。なぜなら、最初に研究者が設定した等至点は、研究前の視点の反映でしかないものだからである。実際に人に話を聞いてから等至点を変えた方がよいと思つて、異なる等至点を設定したくなると思えば、それは失敗を意味するのではなく、むしろ研究者が成長した証であると言ええる。

つまり、方法的側面からみた等至点には2つの意味がある。まず、研究者の興味・関心、H S Iのための「手がかり」としての等至点である。自分の興味を研究に乗せるといふ意味では、**促進的記号** (Promoter Sign) と言えるかもしれない。いずれにせよ極めて重要な目の付け所、のようなものである。次に、分析によつて析出されたものとしての等至点である。実際に人から話を聞いてみれば、等至点に至る経緯は研究者自身が考えたほど単純ではないことがわかる。つまり、研究の当初に設定した等至点は、あくまで外部の研究者目線だったのである。面接と分析を通じて、(研究者ではなく) 相手にとつて意味のある等至点が設定できるようにするのである。

なお、等至点には、その等至点と対極の意味をもつ**両極化した等至点** (Polarized EFP: P - EFP) を設定することが重要となる。等至点と両極化した等至点の軸(次元)を時間の軸と直交させることによつて、2つの次元を定義することがTEMの特徴である。両極化した等至点は、最初、設定された等至点の論理的補集合として仮定するしかないが、分析を通じて意味のある両極化した等至点が設定できるようになるし、それこそがTEM的な飽和 (saturation)<sup>[5]</sup>なのである。

[4] 個人的な価値思考として深く内化され個人に作用する記号のこと (Vaisner, 2007)。何かを指示したり代表したりするという静的な記号ではなく、個人の判断や行為をガイドする未来志向的な動的な記号である。

Vaisner, J. 2007 *Culture in minds and societies: Foundations of cultural psychology*. New Delhi: Sage. (サトウタツヤ(監訳) 2013 『新しい文化心理学の構築——〈心と社会〉の中の文化』新曜社)

[5] 1.5 TEM的飽和」を参照。

たとえば、関西に住む高校生の「夏休みにデイズニールランドに行く」ということの論理的補集合は「デイズニールランドに行かない」ということでしかない。しかし、単なる補集合の設定は「デイズニールランドに行く」ということを理解するための意味を増分させない。分析の初期はこうした補集合設定しかできないとしても、「意味のある」両極化した等至点を設定することができれば、さらに納得のいく分析となる。「家族で関西圏の行楽地に出かけ、車で渋滞に巻き込まれながら過ごす夏休み」が両極化した等至点であるかもしれない。そうであれば、もともとの「デイズニールランドに行く」ということは「電車で移動して家族でホテルに泊まる」ということを含意しているということがわかり、豊かな意味を読み取ることができるといえる。

逆接的に言えば、等至点の意味づけが豊かになるような「両極化した等至点」の設定こそが、TEMの重要なポイントなのである(表1-1)。

### ■ 発生の三層モデル (TLMG)

等至点の前には、いくつかの径路の分かれ道が存在する。あるいは突然新しい選択肢が現れたりする。それが**分岐点** (Bifurcation Point: **BFP**) である。分岐点においては、新しい促進的記号が発生していると考えられる。促進的記号の発生が人を新しい選択肢へと誘うのである。**発生の三層モデル (TLMG)** は、TEAにおける「自己のモデル」であり、三層の山のようなものを想定する。中心の第3層は価値、第2

表1-1 等至点の意義

理念的側面……開放系は複線径路をもち、複線径路の収束点が等至点
方法論的側面……研究の最初の目の付け所としての等至点
経験者のライフストーリーに意味づけられた等至点